

## 小泉八雲のことども（続き）

根 本 重 熙

### 至高の芸術について（東京大学で。小泉先生の講義）（The Question of the Highest Art）

今日の短い講義のために、この様な題名を掲げるに当たり、私は「文学作品」と言わずにただ芸術と言った。というのは、すべての芸術作品は互に緊密に関連し合い、しかも最高真理を示す形式に関連し合っているのです。それぞれの芸術作品は他のものと同じ法則に従い、また同じ原理を明らかに示している。と私は考えるからである。勿論私は特に文学作品について論ずる積りであるが、これを効果的にする為には、まず初めに芸術一般について語らねばなるまい。

芸術は、どの様な形式をとるものであれ、人生を情緒的に表現するものである。と私は考えている。この様な表現は、音楽、絵画、彫刻、詩、戯曲、あるいは小説、においても為し得る。人生に対する真理が——たとえ物語の筋それ自体が真実でない場合でも、あるいは全くあり得ないような場合でも——最もできばえのよい小説の目的とするところである。しかし芸術のジャンルは殆ど無数と言ってよい位に存在する。と言われていた。私が答えようとしている問題は芸術における最高の形式とは一体どういうものかということである。とにかく、様々な芸術上のジャンルに就いてあえて論ずるまでもなく、知的生活は物質的生活よりも、より高いものを表わしているし、また倫理的生活は、この二つのものより更に一層崇高なものを現わしている。と見做しても正しいであろう。要するに倫理的な美が知的な美よりも遙かに勝っているというスペンサー（筆者注：Herbert Spencer, 1820—1903, イギリスの哲学者、社会学者。進化・発展を哲学の中心概念とし、生物、心理、社会、道徳の諸現象を統一的に解明しようとした。その哲学思想は明治前半期にわが国にも大きな影響を与えた。主著「総合哲学体系」10巻。広辞苑）の見解は、この問題の解答に対する恰好の指針というべきであろう。もし仮に倫理的な美が、美の能う限りにおける最高形式と言えらば、芸術のこれまた能う限りの最高形式というものは、その倫理的な美を表現するものでなくてはならない。

哲学的見地から見て、誰もこの前提条件を否定するとは思われない。しかし、倫理的な美が他のすべての美よりも上位に置かるべきであるとか、最高の芸術は必然的に倫理的な美を表現しなければならない。とかいった見解をただ単に述べ立てることは、われわれの心に漠然とした不満足な印象を残すことになるのである。いかにして音楽、絵画、彫刻、詩歌、戯曲、が倫理的な美を表現し得るのか。この問いに答えるのはなかなか容易なことではない。しかも、ある倫理的な目的の為に書かれた書物は、大旨いつも非芸術的で不満足なものであるということは、私が数指

摘してきたことではないか。

この困難の解決は、幾分か恋愛体験によって示唆されるところがあるように思われる。この事実は非常に数等閑に付されているが、他人を愛するという事は、実際は倫理的な経験なのである。諸君は、成程それは全く素晴らしい行為だが、<sup>よこし</sup>邪まな人間を愛したり、あるいは感情や利己心から他人を愛したりすることが、一体どうして倫理的な経験になり得るのか。と問うかも知れない。そういった感情の利己的な側面は、この際なんら重要な意味を持っていない。と私は答えよう。更には、愛される側の人間が善人であろうが悪人であろうが、あるいは可もなく不可もなくといった人物であろうが、この事もまた、さして重要ではない。恋愛経験は、その倫理的側面に関しては、その事態の不道德さによって全く影響を蒙<sup>こうむ</sup>るところはない。と私は主張したい。確かに、悪人を愛することは、非常に不幸で愚かなことに違いないが、それにもかかわらず、ある種の倫理的な経験が得られるのである。しかもその経験は、健全なる人間性にとって、無限の価値を秘<sup>ひ</sup>めている。その経験は、ごく少数の詩人や哲学者によってのみ語られているに過ぎないが、唯一にして究極の重要性は、その経験のある部分に含まれているのだ。それは何であろうか。それは突如として起こる自己放擲への衝動である。というのは、ごく普通の人間の場合における恋情の激発には、二つの側面があるからだ。その一つは利己的なものであり、もう一つは前者より一層強い没我的なものである。言い換<sup>か</sup>えれば、他者を真に愛する最初の結果の一つは、その人の為ならば死も厭<sup>いと</sup>うまい。いかなる事でも辛抱<sup>しんぼう</sup>しよう。愛する人の為ならばどんな艱難辛苦をも物ともしまい。という意志が突如として湧<sup>わ</sup>き起こることである。それは、テニスンが〈自我〉という絃線が突如として消失してゆく体験を歌った有名な詩において述べていることである。

筆者注：テニスンが云々とは Alfred Tennyson, 1809—1892, の詩：“Locksley Hall” の次の一節。

Love took up the harp of life, and smote on all  
the chords with might ;

恋愛は、人生の豎琴を取り上げて、  
いとも強く、あらゆる絃線を弾じぬ。

Smote the chord of self, that, trembling, pass'd  
in music out of sight.

別けても、自我の絃線を弾じたれば、  
<sup>たえ</sup>妙なる音色に震<sup>ふる</sup>いつつ、  
そは、消え失せにけり。

自己犠牲への衝動というものが、すなわち他者を愛するという倫理的経験に他ならないのである。しかも、こういった経験は、テニスンによって書かれた類<sup>たぐ</sup>いの情愛に限定されることはない。別種の愛情表現の形式も、同じような結果を生じるであろう。強烈な信仰心といったものがそうだ。愛国心といったものも同様である。私がただ極普通の愛情の形態のみを取り上げたのは、それが最も普遍的な経験であり、苦痛や損失を耐え忍び、あるいは、愛する人の為には死さえ厭<sup>いと</sup>わないという没我的な願望、すなわち倫理的衝動を最もよく生じやすいものだからである。

形式の美しさは決して倫理的靈感の最高の源泉ではないけれども、その単なる形式の美しさがこういった情緒を生み出していることを、私は知っている。物質的な美と倫理的なそれとの間には、ある関係が存在し得るけれど、それはこの不完全な世界にあっては、今日<sup>しばしば</sup> 数 実現され得るような関係に置かれていないようだ。知的な美というものは——それはわれわれの感嘆の念を惹起することは有るだろうが——われわれの情愛を引き起こすことは決してない。と私は思う。すべての中で最も高尚な倫理的な美こそ、実際、没我的行動の究極の源泉なのである。しかし、その倫理的な美は、超人間的な理想によって人の心を動かしてきたのであって、ある個人の言葉や行為によって為されることは殆ど<sup>ほとん</sup>あり得ない。ある個人の場合には、より高尚な美の形式よりも寧ろ劣った美の形式をこそ一層よく認めてしまい易い。という事実を明らかにして置かねばなるまい。

だがしかし、この事実の中に、未来の芸術に関して、有り得べき価値を暗示させるに足るものが存在する。ある種の美の形式が、一時的な没我の境地に至らしめるような情愛をもって彼らを鼓舞するものである。ということを当然のごとく認めるのであれば、将来において、<sup>まさ</sup>正にこのより崇高なる美の形式が同等の効果を生み出すであろうという事を疑う理由は、何らないように思われる。芸術の最高形式は、恋情の激発が、利己心のない恋人の中に生じると同様の倫理的な効果を、必然的に、観る者に起こさせるような芸術でなくてはならない。と私は主張したい。この様な芸術は、自己を犠牲にするだけの<sup>か</sup>甲斐がある倫理的な美の啓示——その為になら死んでもよしとするような倫理的観念の啓示となるものであろう。この様な芸術は、ある壮大にして崇高なる目的の為に生命、快樂、一切のものを放棄しようとする激しい願望でもって、人々の心を満たすべきであろう。<sup>ちようど</sup>丁度無我の精神が、強い情愛の真の証明となるように、その無我の精神は、<sup>まさ</sup>正に最高芸術の真の証明となるべきである。この種の芸術は、諸君に、寛大な気持ちを抱かせ、自ら進んで自己を犠牲にする事を望ましめ、ある崇高な<sup>こころ</sup>試みを企てしめようとするものであろうか。もしそうであるのなら、たとえその芸術が最高のものでないとしても、より崇高な芸術の部類に属していると言えるのである。しかし、彫刻、絵画、詩あるいは戯曲のいずれかを問わず、もし一個の芸術作品が、私たちに思いやりの深い感情を抱かせることなく、その作品を目にしなかった以前よりも、一層寛大で倫理的に<sup>すぐ</sup>優れた感情を生じさせることが無いならば、それが如何に巧妙に出来ていても、その作品は、芸術の最高形式に属するものとは言い難い。

私がこの様に述べたからと言って、ギリシャ彫刻やイタリヤ絵画の様な芸術作品を<sup>おとし</sup>貶めているのではない——決してそうではないのだ。偉大な彫刻や絵画に抱く印象というものは、崇高な音楽に抱く印象にも似て、私たちをして、私たちの同胞に対しては、一層思いやりの深い感情を、私たちの振舞いにおいては、一層無私の精神を、そして私たちの熱望という点においては、一層崇高な感情を起こさしめるものなのである。芸術がこの様な効果を私たちに生じさせない場合には<sup>しばしば</sup>数 人間性の方に欠陥があるからであって、芸術が悪いのではないのだ。とはいえ、過去の芸術作品が、すべてこの上なく最高のものである。などと私は思っている訳ではない。

至高の芸術とは、物質的理想をではなく、倫理的なそれを扱<sup>あつか</sup>うものであり、その効果は、純粋に倫理的な熱誠 (moral enthusiasm) でなければならない。と私は考えている。彫刻、絵画、音楽——これらの芸術は、私の言う意味での最高芸術をめざしたものとは思わない。しかし、劇、詩歌<sup>すく</sup>優れた物語や小説などは、言い換<sup>か</sup>えるなら、これら大文学と言われるものは、至高なるものを<sup>めざ</sup>目指していると言えるし、おそらく将来においても必ずやそうなると思われる。

### トルストイの芸術論 (同大学で。同先生の講義)

昨年私は新しい芸術論に関する簡単な講義をして、如何なる種類の芸術にしろ、その最高の形式は、高尚な<sup>かつぎよう</sup>渴仰の念を起こさしめ、自分を犠牲にしようと<sup>まじ</sup>真面目に願う気持を起こさしめる力を持っているものでなくてはならぬ。というような意味の事を述べて置いた。私は、こうした芸術の理想的な力を、<sup>けだか</sup>気高い心を持った人が味う初恋の情緒的な力に比較して、気高い熱情が及ぼす真の影響は極めて道徳的なものであり、それは自分を犠牲にしようとする欲望を作り出すものであると言って置いた。

しかし、あの時私は、これと全く同じ問題を取り扱ったトルストイ (Lev Nikolaevich Tolstoi. 1828—1910) の有名な論文を未だ読んでいなかった。その論文は、私が他の講義で述べようと思っていた幾多の真理を強調しているが、当今の著書でこれ程激しい論議をかもしたものは無い。だから、今日これに関する話をするのは極めて有意義な事だと思う。文学界には、どういふ事が起っているかを充分諒解して置く事は、大学生として必要な事である。さて、トルストイの著書が世に現われたのは (最初はただ雑誌の論説という形で発表されたのだが) 文学上の大事件なのである。その本は仏訳で「芸術とは何ぞや」と題されている。〔筆者注：仏訳名 Qu'est-ce que l'art? (1899)〕

講義を進めるに先立って、諸君に注意して置かねばならないが、どんな批評が加えられてもその為<sup>ため</sup>にその論説に対して偏見を抱いてはならない。文学研究の学生が心得て置くべき事で何よりも肝腎な事は種々あるがその一つは、自分の考が、他人の説によって<sup>とら</sup>囚われてはならないと言う事である。私は諸君に講義はするが、諸君が、今言った法則に従って、<sup>か</sup>斯く言う私の説にも気を許さないようにして<sup>まう</sup>貰いたい。単に、私がそう言ったからと言って、ある事を良いとか悪いとか考えないで、公平な気持で読んだり考えたりした上で、私が正しいか間違っているかという事を、諸君自身の頭で見付け出そうとしなければならない。

トルストイの場合では、非難が余り甚だしかったし、ある点においては酷評の論據が余り堂々としていたので、私までが本を買うのを一時ためらった程である。しかし、芸術上の問題を取り扱って世の中の半数の人の怒を買う事の出来るような本ならば、きっと偉大な力を<sup>そと</sup>具えた本に違いないという事を、私はすぐ後で感づいた。実際、ある男を、単にその意見がどうのというだけの理由で<sup>はな</sup>貶したら、<sup>かえ</sup>却ってそれは、その男がどこかに値打ちがあるという立派な証拠なのである。そして今、その本を読んで見て、自分が考え直した事が全く正しかった事が分かった。実に偉大

な著書であるが、それには驚くべき謬説がある事に気を付けなければならない。途方もない思い違いで、苛酷な批評を当然受けるべきものがあるのだ。多くの偉大な思想家は、偶<sup>たまたま</sup>一方に長所を持つと同様に、他方において欠点があるものである。ラスキン（John Ruskin. 1819—1900）はこの種の人物であって、ギリシャ芸術がよく分からなかったし、種々な方面でトルストイに似ていたが、ギリシャ芸術と同様日本芸術など、自分が分からない事は貶<sup>へん</sup>すという傾向を持っていた。ギリシャ芸術に関する彼の見解の一つを見ると、彼の才能がこれだけのものだという程度がはっきり分かる。彼はピナス・ド・メヂチが極<sup>ごく</sup>つまらない小<sup>ちひ</sup>ぼけな人物だと言った。トルストイはこれ以上に極端な事を言っている。彼はシェイクスピアにもダンテにも、その他の何世紀にも亘<sup>わた</sup>って声名を確保している人々に対して何等の好感も持っていない。

彼は躊躇する事なく、文学の総ての流派、絵画の総ての流派、音楽の全部の流派を否定し去っている。もし彼が述べた間違った点をその著書から拾い上げて別にそれだけ全部を本に印刷したとして（こういう事は、既にある批評家達がやっているが）その本を読むと、諸君は、トルストイが突然気が狂ったと思うだろう。しかし、諸君は、こういう欠点を気にかけてはならない。偉大な人物というものはその過失によって評価せらるべきものではなく、その力量如何によるのみであって、随分沢山欠点があるにも拘らずこの本は、何人にも新しくて高尚な方法で考えさせるような本である。その上、この本は極<sup>ま</sup>めて真面目な、私心のないもので、著者は自分の作品さえも公然非難している。即ちそれは、彼の青年時代の驚くべき著書で、彼をして近代小説家の間に最高の地位を得しめたものである。これらは芸術品でないと言っている。

彼のこういう主張には総<sup>すべて</sup>ある一つの条件を具えている。トルストイも、自分が非難する大抵の芸術は狭い意味における芸術だという事に異議を唱えはしない。彼が言う所では、そういうものが良い芸術でもなく、最上の芸術でもない。従って、贅<sup>ぜい</sup>めたものではないとする点である。この点が決まっていれば、私は彼の主張を説明するのに大分説き出し易くなる。

彼が手を下した第一の論旨は大体次の様なものである。古来大芸術と呼ばれているものの大部分は教育のある人達でなければ分からないものである。諸君がギリシャの宝石や像の美しさとか精巧な楽曲あるいは優秀な近代詩などを理解しようとするには、可なり高い程度まで教育され、磨き上げられなくては行かない。近代社会が、美しいと言う所の美が分かる様に訓練されなくては行かない。民衆の中から一人の百姓を連れて来て、偉大な絵を見せたり、偉大な詩を聞かせたり調子が良い音楽の大曲を聞かせたりして見なさい。そうして、こういう物についてどう思ふか、聞いて見なさい。正直な男だったら、村の教会堂の絵を見たり、門<sup>かど</sup>付の歌を聞いたり、踊りの曲の一つも聞いた方がいいと言うだろう。これは無論の事で、誰だつてそれが違ふとは言えない。

しかし、どんな国でも国民の本体、人類の大部分は、教養もなく富んでも居らず立派な者でもない。大部分は百姓や労働者から成り立っていて、一角<sup>ひとかど</sup>の紳士淑女ではないのである。教養ある階級は必ず僅かばかりで、国民の大多数は必ず労働者に留<sup>とど</sup>まっている。それで芸術上の通例の約束や習慣に従えば、芸術とは、単に高等な教育を受けた者や富裕な者にばかり誤<sup>わけ</sup>が分かつて味わ

い楽しめる様に出来ているものだ。と言う事になる。従って、芸術とは、少なくとも人類の十分の九には何の役にも立たない物だという事になるのではないか。

だが、一体どういう点で大部分の人類が劣等だと断定されるのだ。彼等は実際劣等な人間だろうか。彼等は最も高尚な、最も優れた情緒に動かされないだろうか。芸術家達が盛さかんに言っているが一体この最高最善の感情とは何の事か。それは忠節、愛、義務、諦観、忍耐、勇気等すべて、民族の強さや美德を表わすものではあるまいか。百姓は、忠節も、愛も、勇気も、忍耐も、愛国心も、持たないだろうか。言葉を換えて言えば、帝王や祖国の為には、心から喜んで自分の生命を投げ出し、同胞の為には自分を犠牲にし、危急の場合には勇敢な大働きをするし、平和な時には人の為にわが身を捧げ、あらゆる境遇に従って行くという人間は、寧ろ百姓ではないだろうか。本当に百姓こそ最も多くの人を愛するのではあるまいか。一番よい夫であり父であるのは誰だろうか。宗教を価値あるものにした者は種々沢山あるが、その中で一番熱心な信者は誰だろうか。まこと正直な事を言えば、百姓こそ、普通の貴族や富豪よりも道徳的に優れた人間である事を認めるのである。彼は感情的にも優れているし、性格の力においても優れている。人間美と言われるものを、われわれは何所どこに見付けるのか。毎日行われている種々の美德の実例を何所に求めに行ったらよいか。都会の金持連の周囲にか。それとも田舎の人々、つまり芸術が分からない人々の間にか。この問題に対して、たった一つだけ解答があるが、それはラスキンが、ずっと以前与えたのと同じ答である。貧しい者は概して一番良い人達である。これこそ人間美だと言える様な貴いものを求めようと思ったら、貧しい人達の中にそれを求めなければならない。情緒の中で凡高尚なものなら、どんなものでも、そこにあるのだ。少数の者が悪い事、馬鹿な事、をしたりした所で、どうこう言う程の問題ではない。大多数の人達は善良なのだから。

大多数の人達は善良でありながら、芸術とは没交渉である。しかし、芸術とは何であるか。芸術とは言葉や音調、色、形で情緒を伝える力であって、人々の感覚を通して真理や美を感じしめる手段である。それなのに、一般民衆には芸術が分からないと言う。そうやって来ると、われわれは彼等民衆が真理や美の感覚を持っていないと考えざるを得ないではないか。人間の情緒の中で一番立派なものは民衆にあるという事を既にわれわれは否応なしに認めてしまっているではないか。それでもしも民衆の大多数が、あらゆる立派な情緒を持っているとしたならば、又われわれの所謂芸術が彼等の感情や意志に感動を与える事が出来ないとしたならば、何所にその罪があるのだろうか。それは民衆にある筈はない。芸術の内に無ければならない。

こういう議論からして、もう一つ別の問題——「われわれが今日まで大芸術と呼んでいた物は人類の最善の感情に訴えて居る」と言うのは果たして事実だろうかという問題が起って来る。事実ではない。とトルストイは大胆にも言い放はなっている。もしそれが事実ならば、それならば民衆は芸術に感動させられるだろう。が、彼等はそれに感動しない。それを理解しない。それを好まない。これは芸術が立派な貴い情緒に訴えはしないという、あからさまな証拠である。それならば何に訴えるのであるか。例の論文を見ると、この点におけるトルストイの論評は最も手応てごたえがあっ

で最も驚くべきものである。尤も時折間違ひがあるので論拠が弱められてはいるけれど。彼は言う。われわれが芸術と呼んで来たものは、官能主義や情欲に訴えるものである。が、百姓は心が綺麗なのだ。彼は女の裸体画にも、様々な恰好をしている露骨な彫像にも気を留めない。又情欲を唆す様な小説や詩にも無頓着なのである。官能主義こそ誠に力弱いもので、申し分のない程強い人間は決して官能主義者ではない——彼の生活は頗る道に叶って居り、頗る自然である。又こんな事を言っても構わなければ、彼は到底浮気には成れない程極めて善良な動物なのである。大概の動物は純潔なものだ。ところが、西欧の芸術、ギリシャ芸術、イタリア芸術、フランス芸術等は単に見る人の官能にばかり訴えていて、皆その時代を通じて猥りがましいものだったのである。勿論例外はある。が、芸術の意味を考えようとするには、大局から推して行かねばならない。私はトルストイが言っている事が、この点においては全く正しいように思う。そして、誰も彼に反対する事は出来ないと思う。

次に文学について言おう。農民は立派な文学が分らないし、立派な文学も彼に何等訴える所がない。彼は自分特有の頗る単純な、美に満ちている文学——側々人を動かすような歌や物語を持っているのであって、どんな詩人でも、賤しい百姓共の文学からこそ一番良い一番純真な靈感を受ける事が出来るものだと一流の文芸批評家は認めている。農民は文学的の情緒を感じる頭がないなどとは言えやしない——それどころか、逆に、そういう情緒を授けてくれる事も出来るし、教えてもくれる。即ち、英国に在っては、ウォルター・スコット（Walter Scott. 1771—1832）以後の凡ての英詩人に、又それ以前の多くの人々にも教える所があった。スコットランドの詩人中実に最も偉大な人は一介の貧しい農夫であった。だから一百姓と雖も文学的の最高の種類のものに決して門外漢ではないという事をわれわれは認めなければならない。けれども、立派な文学、教育ある人々の文学は、少しも彼に興味をそそることが出来ないのである。それ故に、罪は百姓にあるのではなくて、芸術に在るのに違いない。そこで、こういう事を考えて見よう。一流の文芸は貴い情緒を表現し教導すると考えられて居るのだが、その貴い感情の本性は何であろうか。

この点でトルストイは又々驚くべき論評を加えている。一流の大戯曲というのは、罪惡、殺人情欲、私通、叛逆等、人間性のありとあらゆる恐ろしいものを主題とした劇である。所謂小説なるものは、その大部分は、読者の劣情を微妙に刺激する目的で書かれた社会生活の物語である。われわれの詩も、その大方は、幾百年この方、男女間の愛とか、ある種の馬鹿げた感情を取り扱って居る。私はただトルストイの意見を極簡単に述べているだけであるが、彼がこうして非難して居る中に堂々たる人の名を盛んに並べて居る事や、そんな大それたまねをして居るのに拘わらず彼の言う事が、如何にも正しいように思われる事が分かったら諸君は嚙驚かれるだろう。それから次に彼はこんな事を言っている「猥らな話、罪がからんだ話、贅沢な事を書いた話、等では多くの正直な民衆に訴えようとしても、とても駄目だ。彼等の心に触れる事は出来ない。彼等は極めて善良な人達だから、そんなもの位で喜びはしないのだ」

トルストイは近代の音楽やその他の芸術の枝葉に渡って説いて居るが、今までの説明で十分に

分かっているから私は詳しくは述べない積りである。彼の結論はこうだ。「もし芸術が感情を言い表わしたり伝えたりする手段であるとしたら、最も貴い種類の感情を言い表わしたり伝えたりするものこそ、最も貴い芸術でなくてはならない。ところで、最も貴い感情と言うのは凡ての人に分け持たれる感情であって、本当の芸術は単に一部の階級に止まらず、凡ての人に訴える事が出来るようなものでなくてはならない。現代の芸術が大芸術でないと言う証拠、それどころか、寧ろ悪い芸術であるという証拠は、一般の民衆がそれを理解出来ないと言う事で分かる」

われわれは、ここに二つの容易ならぬ反対論にぶつかる事になった。

第一。一般の民衆に偉大な芸術が分からないと言うのは、何もむつかしい理屈が有るのではなくて、彼等が愚鈍で無知だからというだけの事だ。と言ってしまえる。文学上の言葉が分からないのに、どうして偉大な文学作品が十分に分かるだろうか。彼等は極単純な物しか読めない。だが立派な詩や小説を読むには教養ある者の言葉を知って置く必要がある。教養のない一般民衆は勿論分かる筈はないのだ。

トルストイは、この抗議に向って頗る大胆に対抗して居る。所謂教養ある者の言葉は偉大な芸術作品には用いてはならないと答えている。教養ある者の言葉は、医学の術語とか植物学のそれとか、又は種々の科学の専門語の様に特別に作られたものであるから。偉大な作品は民衆の言葉即ち、真に一国の言葉であり国民の言葉である所のもので書かれなくてはならない。又民衆に分からない様な特別な用語で書いたりして文学を近づきにくいものにするのは、自分勝手な、よこしまな、無法な事だと思ふと彼は言っている。更に、世界で最も偉大な書物は決して特別な文学語で書かれたものではなくて、一般民衆の普通の言葉が使われている。と言っている。これを説明する為に、彼は偉大な宗教書や偉大な宗教詩、聖書や仏典等、特別な言葉を使わずにその当時通用していた国語で書き上げられたに違いないものを引用している。大多数の人にはっきり分からない様な文学を作るのは、一体どういう訳か。偏狭だからと言うより外理由が立たないではないか。同じ考えを述べるのにも文学語で書き馴れた者には、普通の言葉では、よく書き表わせないなどと言うのは無意義な事である。単なる演説位で大思想が発表出来ないと考えるならば、それは訓練が悪くて、習慣が悪くて、教育が間違っているからなのだ。今までに発表された最も偉大な思想や最も深刻なそれは宗教書の中に民衆の言葉で書かれている。一口に言えば、トルストイの言わんとする所は文学教育のあらゆる制度が徹頭徹尾誤っているという事である。この申立については考えて見る必要がある。

私はここに一文を引用して、芸術の不可解性という事についてのトルストイの意見を説明して見よう。

「ある芸術品が良い。そのくせ大多数の人々に分からない。というのは、恰もここに一種の食物が有ってもそれは良いには良いが、人類の大多数は食べないように用心しなければいけないと言うのと同じようなものだ。大多数の人は腐ったチーズや英国で“high”と言われている肉——獅で得た野獣の肉で少々腐ってくるまで放って置いたもの——などを食べるのは確かに好まないだ



ろう。その獣肉はひねくれた嗜好の人には頗る珍重されている。併し、パンや果物は大多数の人々の口を喜ばせるのだから、こればかりはよい食物である。そうして芸術の場合もこれと全く同じ事だ。ひねくれた芸術は大多数の人間を喜ばす事は出来ないが、良い芸術は必ず凡ての人を喜ばす事が出来る様に定まったものでなくてはならない」

さて、当今大芸術と言われているものが、一般民衆にとって、どの程度まで不自然に見えるかを説明した興味ある一文を引用して見よう。

「現代社会の誤った説のために未だひねくれてしまっていない人達、例えば、立派な工匠や子供等の中には、どういふものを非難、又は誉めてよいという極はっきりした考えが、生れつき出来上っている。一般民衆や子供の本能を見ると、讚め称えるものと言えば正しく“偉大な肉体の力ばかりである”——例えばヘラクレスや英雄、征服者など——そうでなければ、“道徳の力を称えるものだ”——例えば、人を救う為に美も力も抛った釈迦牟尼とか、われわれ人類の福祉の為に十字架の上で死んだキリストだとか、聖人や殉教者の場合。こういう考えは一番円満な考えである。単純で有りの儘な正直者は、肉体の力は尊敬すまいとしても無駄なものだという事を実によく知っている。肉体の力なるものは本来尊敬させずには置かないように逼るものだから。又彼等正直者は同じように道徳の力、即ち善い事をするために骨折る人間の道義心の強さを尊敬しないでは居られないのだ。彼等は、道徳の力の美しさに自分の本心がすっかり引きつけられるのを感じるのである。こういう単純な心を持った人達は、肉体の力や道徳の力の為に尊敬される人達よりもっと尊敬される人が現にこの世に居ることを認めて居る。彼等は、あらゆる力が強い英雄や道徳的に正しい英雄等よりも、もっと尊ばれ、もっと讚められ、もっと報いられる人達が有る事を認めて居る。これはただ彼等が歌ったり踊ったり詩を書いたりする事を知っているからである。百姓には、アレキサンダー大王、成吉思汗ジンギスカンやナポレオン等が真に大人物であった事がよく分かる。何故それが分かるかと言えば、そういう人物の一人であれば誰でも、百姓や大勢の仲間達を皆殺しにしようと思えばそれが出来るという事をよく知っているからである。百姓は又、釈迦やソクラテスやキリストが大人物だった事を承知している。自分や他の人々が、彼等の様に成ろうと努めなければならない事を感じもし、知っても居るからである。だが、女の愛を取扱った詩を書いたぐらいの事で、どうしてその人が偉いなどと言われようか。それこそ決して彼が理解出来ない事である」

別の所で、トルストイは、一層面白い例を挙げている。彼は言う「一般の人達は、天帝、天使、聖者、神、英雄等の彫像を見る事に馴れている。その人達は、この様な像が作られた道理をよく弁えている。しかし、情欲や絶望の詩を書いたボードレル（Charles Baudelaire. 1821—1867）のような人を表彰する為に像が立てられたという事を聞いたり、バイオリンの弾き方を心得た男を記念する為に像が立てられたという噂を耳にしたならば、そうした事は彼等には奇怪千万に思われるのである」それは多分そうだろう。

私はトルストイの意見に対する第二の強硬な反対論について考えてみた。それはトルストイ自

身が意に留めなかった抗議——哲学的の抗議である。当今では一般に、優れた知識は優れた神経組織と関連したものとして考えられて居るのが常である。多くの人達は、一般民衆が高級な芸術が分からないのは、彼等の神経組織が劣っているからだという事を言おうとしている。確かにそうに違いない。教養がある人達や金がある人達に比べて、彼等は鈍感だ。だから、美を感じる事が出来ないのだと思われている。彼等は、他所ではとにかく、ヨーロッパでは、むさくるしい、嫌な臭がする所で惨な状態で暮らして居る。こういう人達がどうして文明の微妙な芸術を理解する事が出来よう。多くの人々はこういう風に説くだろうが、頭がよい思想家は誰もそうは言うまいと私は思う。実際の所、近代のヨーロッパでは、一流の、思想家、芸術家、学者、は実に農民階級から出ているのである。百姓達のある者は随分苦しい中から、自分達の子供に人並以上の教育を与えている。英国の堂々たる大学でも、こういう人達が最高の名誉のいくらかを勝ち得るのであるが、この事実はスペンサーがずっと前に「健全な精神の土台は健全な身体である」と言った言葉を証拠立てている。神経組織の美的修養について、トルストイが何を言おうとしたか私は知っている。彼は鋭い感受性と言われるものは感覚過敏症、即ち、神経の病的状態に過ぎないとあっさり言って退けるだろう。しかし、この問題はさて措いて、私は一つ真面目な質問をして見よう。貧乏のどん底に居るそこらの百姓は、果して美に対して無感覚だろうか。あるいは、どういう種類の美を標準にしたらよいのだろうか。ヨーロッパの芸術の標準は、人間の美を認める事が美に対する能力の最高の標準点だと見做している。平凡な人、民衆の中で一番平凡な、無知な人は、人間美に対して無感覚だろうか。そうした人は、女の美しさを見る眼が、すっかり芸術家になりきった人より劣っているだろうか。さて、私が述べる事を諸君はどう考えるか知らないが、私はこう言うのを少しも憚らない。「この世で一番よく美を鑑識する者は、そこらの平凡な人間である」と。私はかかる階級の人 尽くが他の者より優れているとは言わないが、馬や牛を見て最先に、最もよく判断する人こそ実に、男なり女なりを一番早く一番よく判断する人である」と言いたい。

要するに、最も良く最も深いという意味で、美しいとか雅やかとか言われるものは、肉体の力を表わしているのであるが、われわれよりも百姓の方がその力をずっとよく知っているのである。百姓は人生を見るのに馴れて居る。しかも、生れ付きそうなのだ。美というものは動物や人間が強い力を出したり軽い動作をするのに一番都合のよいように仕組んだ骨組の、一定の釣合いを指すのである。更に、美を取り除けた肉体を考えるとしたら一体それは何だろう。それは力の節約だということになる。即ち、肉体とは出来るだけ少ない物質を用いて、出来るだけ多くの力が出せたり活動が出来たりするように作られたものでなくてはならない。動物を判断する事に馴れた人が人間を判断する事が出来ないなどというのは全く馬鹿げた事である。事実こういう人は、あらゆる鑑識家の中で一番優れた人であって、滅多に間違ふような事はない。さて、歴史を辿ってみると、この事実を裏書きする珍しい実例が、立派な一国の君主達の話にいくつもある。

バグダッドの酋長が豪奢を極めて居た頃、酋長は申し分のない美人を探して自分の伴侶にしよ

うと思ったが、その時彼は必ずしも地方の長官や貴族の家ばかりに出向いて、そうした婦人を見付けようとはしなかった。彼は砂漠に住んでいるアラビヤ人の許に出かけ、馬を飼い馴らしている人達を訪ねて、若い女を探してくれるように頼んだ。最も名高い例はオンマヤッド家の第五世の酋長アブダル・マリックの話であるが、彼が普通の馬商人に美人の選び方を聞いた所、その男は立所に答えた「婦人をお選びになるのなら足の恰好がこういった様な者でなくてははいけません」などと言って体中どこもかしこも残らず説明し、又馬商人が馬の一番優れた点を説明するのと、すっかり同じ様に体の中で一番優れた点を詳しく説明した。酋長はこんな無骨な男が女性美に関して、自分に仕える朝臣や芸術家などと比べ物にならない程沢山知っているという事が分って驚いたのである。この事は生活——活動生活をよく知りぬいて居れば、どんな知識でも悉くその奥義を掴む事が出来るという事なのである。（中略）

さて、この論文の本題に立ち帰って講義を終るとしよう。私はこの論文が諸君に何かしら考させるものがあるだろうと思う。そして、私が度々主張した一つの事柄、即ち「やがては日本の作家が普通の人の話す言葉で文を書くようになるだろうが、そういう時が来るのが早ければ早い程日本の文学の為にも良いし現代の知識を一般に行き渡らせるにも好都合だ」と言い放った事が決して間違った考えでない事を、この論文が必ず確めてくれるだろう。私は、この本が非常に偉大な立派な本だと思うし、又始から終まで本来誤りのない物だと思う。

その本には間違いもあるにはある。例えば、トルストイはキップリング(Rudyard Kipling. 1865—1937)の事を、民衆には分からない原来不明瞭な作家だと言っているが如きがそれだ。ところがキップリングは端無くも民衆相手に話す人に外ならなかったのである。彼は彼等の国の言葉を用いているのだ。こうした些細な間違いは、外国人の事を充分に知らない為であって少しもこの教訓に含まれた道徳の価値に差障がない、ではあるが、よく考えて見た上で改正するなどという事は逆も不可能である。

私はトルストイが全く正しいと信ずる者ではあるが、彼の説を丁寧に守ったら、私は諸君に講義する事は出来なくなる——私はこの大学では自分の務を果す訳にいかなくなる。もし、そんなことをしたら、英国の文学で名高い何百冊という著書は、皆本来悪い本であって、少しも読む必要はないと無理にも言わなければならない事になる。然るに、実は私は今言った様な著書の文学的価値を諸君に指摘する目的で事に当たっているのである。

以上、小泉先生の文芸批評の立場を（トルストイの芸術論を併置し）長々と採録して来たが、それによれば「いかなるものが、最高位に置かれるべき芸術（文学作品）であるか」という問に対して、「道徳的美を表わすそれである」と回答を与えている。この説明で不十分であればとて、恋愛経験に訴える事によって説明の補強を試みる。その経験には、利己的側面もあるが没我的なそれも存在し、しかも後者は前者よりも強靱である。他者を真に愛する最初の結果としての自己犠牲の衝動がある。道徳的美は、この様な没我的行動の最高の源泉であるのだ。と

小泉説によれば、芸術（文芸作品）の価値なるものは、その倫理性、倫理的感化作用の在存

に置かれていることは確実である。さて所謂「芸術至上主義」(乃至「芸術のための芸術」)：(L'art pour l'art)においては、芸術作品は一般社会から切り離された特殊の存在であるから、その価値は、必然的に、芸術的観点によって決定されるべきで、芸術外的基準によるべきではない。又は、芸術はそれ自身の為だけに存在し、他物の手段としてあるのではないと主張しているという。成程、芸術はその様に主張するのは正当であろうが、これは一方では、人生や社会から逃避する遊戯的退廃的傾向を助長する弊も認められるという。斯くては、それは実人生に対しての積極的な所謂「アンガジュマン」(Engagement：社会参加)を維持出来ないで結局は芸術自身の衰弱、自己否定に終る事もあるだろう。

小泉説は上述の通り、積極的肯定的倫理的に“参加”を維持しようとするものであることは、筆者には誠に興味深い。彼の立場は、芸術に対するもう一つの主張——「人生の為の芸術」(L'art pour la vie.)に同じか、酷似していると思ったので。トルストイが、この主張の支持者であった事を後で知った。上掲論文を小泉先生が講義している事も頷ける。

さて、物の本によれば「ハーンは熱心な美の追求者であり、芸術至上主義者、耽美家である」とする論者も居るという。前掲講義を聴いた限りでは、その論者の説の前半は正しいが、後半は、そうではない。彼に対しての予断、偏見、誤解の類なぐいであろう。と筆者には思われる。“耽美家”という語が「美を最高の価値と位置づけて、それを彼の人生の唯一の目的と考え、真理や道徳には関心を払わない人」の意味であるならば、小泉氏は倫理性やその感化力うなずに重点を指向しているがそれのみに拘泥しているのでない事は、その講義の中で「ある倫理的な目的の為に書かれた書物は、大旨いつも非芸術的で不満足なものである」と述べている事で明白である。

### 小泉先生の、ジョンソン博士論

彼(小泉先生)は、前掲の創作論の中に名前が出ているジョンソン(Samuel Johnson：1709—1784)——母親の葬式の費用を作るために「ラセラス」(Rasselas, The Prince of Abissinia.)という作品を二週間で書き上げたという——について講義をしている。その一小部分のみを適宜採録する。彼は批評には向いていなかった。高い意味では芸術家でなかった。ある種の方面のロマンチックな感情が皆無に等しい。彼の「詩人伝」(The Lives of the English Poets：1779—1781)は今読んでも面白いが、批評としての価値はまるでない。彼が誉め上げていた詩人で今日も読まれている人は一、二の例外の他には誰も無い。彼は感情以上に形式を重んじた。彼の誤った批評の原因は大部分ここに在り、彼は古典的精神に大いに忠実であった。この様な批評が、当時の既成の道徳的因襲に合致しない文学全体に向けられたので、その影響は実に大きかった。道徳批評家として完全に独裁的で、彼の力は今でも生き続けている。文学作品に制約を課するという事は、その真の発達を妨げずにはおかない。もし、ジョンソンが二、三人続いて現われたとしたら、文学は氷りついて麻痺してしまうであろう。彼の、書物批評の方法は“Is this a good book? Is it a moral book? Is it a Christian book?”というもので、道徳的に非難の余地がないとなると、次

には「この作品は古典主義の原則と統一に基づいて書かれ、それにふさわしく構成されているか」と尋ねる。この二つの試験に合格したものだけを、彼は倫理上も美学上も申し分のない作品として誉めることになる。

ジョンソンの方法即ち作品を、まず道徳的見地から評価するそれは、田舎教師的批評で、大学教師の批評ではない。生徒の素行を第一に問題とし、学業の知識、成績を第二義的に見る田舎教師の方法である。これは悪い方法であろうか。確かに狭く小さいが、一概に悪いとは言えない。特に教師に限って言えば、これ以上安全な方法はないと思える。しかし、ある分野にとって、善なる方式が、別の分野にまで応用すると不十分であることが生じ得る。

書物の評価を道徳的優位で判断する事自体は悪いことではないが、問題は、道徳的価値とは何かについては、各人の意見が異なるという事である。道徳的判断が何かの価値を持つためには、該判断者の人格如何に依存しなければならない。その重要性を維持するにはその人の知的能力に信頼が置ける事が必要である。彼の弟子たちには、彼と同様の知力がなかった。その様な人々が彼の方法を行なおうとすれば、その結果は prudishness (猫かぶり), prejudice (偏見), イギリス的なものの中で最も根強い intolerance (不寛容) ということになってしまう。ジョンソンが悪影響を及ぼしたのは、彼自身の罪というよりは、後人の罪であると言ってよい。(後略)

小泉先生が最高位の芸術の必須の要素として、その第一に倫理性を掲げるからと言っても、以上見て来た通りに、彼の所謂倫理性なるものは、極めて広義なもので、単なる、道徳的説教、修養講座でのお談義等とは異質のものであることを知るべきであろう。

#### 小泉先生とハーバート・スペンサー

先生発書信による。(順序不同)

1904年8月

親愛なるクロスビ様

あなたと同名の人で、合衆国陸軍の一青年中尉が、約二十年前に、ハーバート・スペンサーの研究法を始めて私に教えてくれました。そのクロスビ氏には、私は何時も真に恭敬な感謝の念を感じます。そして、クロスビという名を持っているどんな人に対しても、何時までも好意を持ちたい気になるであります。(以下略)

訳書大谷正信注：クロスビ氏(1856—1907)はニュー・ヨーク市で生まれ、同大学その他で学びトルストイに共鳴し、後年をその主義の宣伝に費やした。(以下略)

スペンサーの倫理学原理を読んだ後、クレイビエルに送った手紙(発信日付不詳)

自分ながら、考えが変わった事に驚いている。これまでの私の変な哲学は君が知っている通りである。この頃ある友人が、ハーバート・スペンサーを読む事を教えた。突然これまでの東洋哲学の研究は、全く時間の浪費であった事を発見した。私は又私が持っている僅かばかりの一般知識

を如何に応用すべきかを始めて発見した。厭世観をつまらなくし、すべての種類の信仰に対して、新しい尊敬を教える大疑問が、不意に、又私にとっては永久に、再発したので、言うべからざる愉快を感じた。略言すれば、「原理」を読了したその日から、全然新しい知力的生涯が私の為にかかれた。これから数年の間にこの大哲学の残部を研究しようと思う。

訳者田部隆次付言：クレイビエルは音楽批評の大家、その著書の中には、日本語に反訳されたものもある。

1886年4月 (オコナー宛) ニュー・オーリヤンズにて。

(前文略) ハーバート・スペンサーの研究で私の意見に明白な変化が起こされたという事をお話してよいのです。凡の何々主義<sup>すべて</sup>、何々主義との共鳴から、スペンサーは全く私の心機を一転させてしまったのです。と同時に彼は大疑惑という漠然としてはいますが、大自在力が、ある慰藉を私の心に起こさせているのです。私はもう、人間の物質活動論の信仰に執着することが出来ません。そして訓練が出来ていない心につけ込む、あの強情な懷疑主義は、私に在っては永久に消散してしまつたのです。この哲学があなたに興味を与えるかどうか在じません。しかし、あなたがもし既に、その道の達人という訳ではないのでしたら——何だか、そうらしく思われますが——きっと興味を持たれることと存じます。私は今までのところ、「第一原理」を読んだだけです。しかし、あとは皆その系論に過ぎないのです。(以下略)

訳者田部隆次付言：オコナーは、ハーソンの文を読んで文通し友人になった人である。

1887年4月 (エリザベス・ビスランド嬢宛) ニュー・オーリヤンズにて。

(前文略)「第一原理」から始めて、私は私の友達に皆ハーバート・スペンサーを読ませてみようとしているのです。撈取り<sup>はかど</sup>ませんが、非常に貴重な読書です。凡の人の知識や企図や観念を分類しています。私は改宗者を三人<sup>こしら</sup>拵えました。彼の読方は項別で行くのですが、その凡が番号付けになっています。私は今「生物学」の大きな二冊と首っ引きをやっています。そうして「社会学」一部は読みこなしました。「心理学」は彼の最も偉大な作ですが、最後に手をつける積<sup>つもり</sup>です。完全に読み終わるには、少くとも四年の研究です。しかし「第一原理」は凡の綱領を含んでいます。他の巻は単に系論に過ぎません。スペンサーを読んだ時には、凡の人知の最も滋養になる部分を消化したことになるります。文体が又骨折って読むだけの価値があります。力がある、締まった、調子がよい文体です。(以下略)

小泉先生のハーバート・スペンサーへの傾倒振りが分かる。彼の講義の中にもスペンサーの名が時々出るのも宜<sup>むべ</sup>なるかな。である。スペンサーショックの直撃である。彼は自ら<sup>みづか</sup>を、スペンサーの弟子と呼んでいた。(未完)

参 考 文 献

- |        |          |       |                               |
|--------|----------|-------|-------------------------------|
| 小泉八雲全集 | （第一書房）   | 田部隆次著 | 「 <sup>ラファディオ+ヘルン</sup> 小泉八雲」 |
| 明治村通信  | （博物館明治村） | 広瀬朝光著 | 「小泉八雲論」                       |
| 雑誌へるん  | （八雲会事務局） | 高木大幹著 | 「小泉八雲と日本の心」                   |
| 平井呈一著  | 「小泉八雲入門」 | 池野 誠著 | 「松江の小泉八雲」                     |